

【特殊音節の読み】

日本語は、「あ」ならば「a」と発音するように、1文字に対してひとつの音に対応しています。しかし、小さい「っ」（促音）や、小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」（拗音）などはこのルールが適用されません。

例として「かけっこ」という言葉で考えてみます。文字としては「か」「け」「っ」「こ」の4文字ですが、音としては小さい「っ」は発音せず、3音になります。また、「しゅくだい」という言葉は文字としては「し」「ゅ」「く」「だ」「い」の5文字ですが、音としては「し」と「ゅ」が合わさり、「shu」というひとつの異なる音を生むので4音になります。

特殊音節は、他の仮名文字のように文字と音が1対1に対応していないため、頭の中で音と文字を対応させたり、操作したりすることが困難な子どもにとっては、読んだり書いたりすることがむずかしいと考えられます。

参考文献 「多層指導モデル MIM 読みのアセスメント・指導パッケージ ガイドブック」
（海津亜希子、学研、2010年）